

インフラ整備を通じた相互発展を目指す

インフラ整備を通じ社会に貢献したいとJICAの門を叩いた田口裕介さん。インフラ事業を「日本と開発途上国が共に成長する重要な鍵」と捉え、広い視点から事業に携わるべく、日々奮闘を続けている。

インフラ整備の切り口から 途上国の生活向上に貢献したい

私は2015年にJICAに入構し、アジアを中心に港湾や鉄道、バスなど広くインフラの整備事業に携わりました。今年5月から中東・欧州部欧州課に移り、ウクライナ、セ

ルビア、ルーマニアを主に担当しています。大阪府で生まれ育った私は、幼いころから海が好きで、大阪湾や、祖父の家がある福岡県の玄界灘などへよく釣りに出掛けていました。その後も海への強い関心を持ち続け、大学、大学院では土木工学の一分野である海岸工学を専攻。海浜変形や高潮のシミュレーションについて研究を行いました。

中でも印象深いのは、大学時代にバングラデシュで行った研究です。同国沿岸域では、大河から流れ込む土砂やモンスーンなどの影響で、海浜変形と呼ばれる海岸線の変化が問題となっていました。ひどい年は、一年間に約1キロも海岸線が変化し、住民が立ち退きを余儀なくされていたのです。私は、少しでもこの課題解決に貢献したいと、宇宙航空研究開発機構（JAXA）から衛星画像データの提供を受け、さらに現地データを収集し、堆積・侵食の分析を行っていました。また、学生時代に60カ国以上を旅行したことで、世界の人たちのさまざまな生活の在り方、その生活を支えるインフラの重要性を認識することができました。

これらの経験を経て、自分が専門として研

究していた土木工学という切り口から、日本の持つ技術を生かして開発途上国のインフラを改善したいと、強く意識するようになりました。さまざまな国でインフラ案件を実施しているJICAは私の思いを体現するには最高の組織と考え、入構を決めました。

入構後は、幸運にも、志望していた「社会基盤・平和構築部 運輸交通・情報通信グループ」に配属されました。バングラデシュで3カ月間の現地研修を経て、早速多くの重要プロジェクトに関わることができました。

特に印象に残っている仕事は、カンボジアの海の玄関口であるシハヌークビル港の整備プロジェクトです。ここでは、円借款で港湾施設を整備するだけでなく、技術協力で電子海図の作成支援と現地職員への技術移転を行いました。海図は、船舶の安全な航行・出入港を支える重要な基盤です。しかし、この地域では、数十年来更新されていない紙の海図しかなく、実際の海岸線の位置や水深データが一致していない場所も見られました。

物流量が増加する中、港湾は経済発展を支える屋台骨のような存在といえます。それだけに、現地の注目や期待も一段と大きく、自分の専門分野でもあるため、とりわけ緊張感と強い責任を感じながら仕事に当たりました。

広い視野を持ち ニーズを捉えた案件形成を

現在所属している中東・欧州部欧州課は、対象国の政治経済から分野別課題まで広く見



JICA
中東・欧州部 欧州課
田口 裕介
TAGUCHI Yusuke

大学、大学院で土木工学を学び、専門は海岸工学。2015年にJICAに入構し、「社会基盤・平和構築部 運輸交通・情報通信グループ 第二チーム」で、アジアを中心に港湾や鉄道などのインフラ整備事業に従事した。今年5月より現職。



バングラデシュ南部・発電所建設予定地を現地関係者と共に視察

る必要があるのが特徴です。扱うテーマも、環境関連から財政支援まで多岐にわたります。入構以来、一貫して運輸交通の課題に向き合ってきたので、こうした仕事の多様性を難しく感じると同時に新鮮にも感じます。ここでの経験が、確実に自分の仕事の幅を広げてくれると確信しています。

私は入構3年目の若手職員ではありませんが、海外のプロジェクトに関わってきて感じることは、相手国は私たちJICA職員を年齢に関係なく日本の代表と見ているということです。特に相手国との協議の際は、発言の一つ一つに気を遣いますし、常に緊張感を感じています。

将来は相手国が真に必要なものを見極め、生活向上に資するインフラ案件づくりができる職員を目指します。そして国際社会における日本のプレゼンス向上につなげられるよう、JICA職員としての誇りを持って職務に励みます。



カンボジア「電子海図策定支援プロジェクト」の終了時に開かれた国際セミナーに出席した田口さん（左から2人目）。カンボジア側の関係者や国際機関の関係者へ、プロジェクトの成果を発信した